

あーまたこの二月の月かきた

ほんとうにこの二月の月かきた

## 母のオブライイト

いやな月こいをいばいに

めかねかくもる

小説「蟹工船」で知られる作家小林多喜二は、明治36（1903）年、現在の秋田県大館市下川沿に生まれた。多喜二が生まれたころの小林家は生活に困窮しており、多喜二4歳の冬に一家は小樽へ移住した。小樽でパン工場を営んでいた伯父を頼っての渡道だった。小樽での一家の住まいは、小樽駅より2駅札幌寄りの小樽築港駅の駅前であり、ここで伯父の工場のパンを売る店を始めた。多喜二は伯父の援助で学校に進むことができ、卒業後、小樽市色内にあつた北海道拓殖銀行小樽支店に就職したのであ

る。多喜二は築港駅から旧手宮線色内駅まで列車で通い、この銀行員時代に「蟹工船」や「不在地主」などの代表作を執筆していた。多喜二の生きた時代は、今のよう言論の自由といったものは保障されておらず、警察からマークされていた多喜二は、昭和8（1933）年の2月に非合法活動家として捕らえられ、激しい拷問を受けてわずか29年の生涯を閉じるのである。

この人生の終え方が、多喜二について語るときの気分を少しばかり重苦しくさせる。社会の暗部というか、傷口というか、できれば触れずに避けて通りたくなるのである。そんな重苦しい気分を和らげてくれるのが、三浦綾子の「母」という小説だ。この作品は、多喜二の母親セキの独り語りという手法で、秋田時代の小林家の様子や、小樽での一家の暮らしぶり、多喜二が死んだときの状況など、多喜二の全生涯が母親の目線で描かれている。作品自体は、実際にセキが語ったものを聞き書きしたのではなく、周辺の人々への取材や多くの参考文献を元に、三浦綾子がセキの想いを代弁するような形で創作したものである。

この小説でも紹介されているが、読み書きができなかったセキも晩年にはわずかに字を覚えることがあつたようで、死後、遺品の中からノートの切れ端にたどたどしく書かれた遺筆が見つかった。

あーまたこの二月の月かきた  
ほんとうにこの二月とゆ月か  
いやな月こいをいばいに  
なきたいどこいいてもなかれ  
ないあーでもラチオで  
しこすたしかる  
あーなみたかてる  
めかねかくもる

（大意）ああ またこの二月の月かきた／ほんとうにこの二月という月がいやな月／声をいばいに泣きたい／どこへ行つても泣かれない／ああ でもラジオで少し助かる／ああ 涙が出る／めかねかくもる

小林多喜二という人物像を、母はオブライイトで優しく包んで、改めて私たちに引き合わせてくれている。



小樽築港駅を出る函館本線の電車。多喜二はこの駅から旧手宮線の色内駅まで列車で通勤していた。小樽築港駅前には多喜二一家の住居跡を示すプレートがある